

国内研修報告書

コロナ禍において、マスクの着用は必須の感染症対策であるが、唇、歯、舌、あごの動きや表情などから情報を読み取る聴覚障害者にとっては、コミュニケーションの大きな壁になっている。そこで私たちは、口元が透明なマスクを作製し、パキスタンの聴覚障害者団体に贈るプロジェクトを行った。特に、パキスタンの主要都市であるイスラマバードとカラチ周辺に住んでいる方々を対象にした。パキスタンを対象にした理由は、パキスタンには聴覚障害者向けの口元が透明なマスクがないからである。現状を知るために行なったワークショップでは、参加した37人のうち9割以上の方々が「通常の口元が見えないマスクによってコミュニケーションが難しくなった」と訴えていた。そのような声を聞き、コロナで実際に現地に行くことはできない中でも、なんとか国際協力がしたいと強く感じた。

マスクは、アップサイクルの観点から作製することにした。アップサイクルとは、廃棄物に付加価値をつけ、新たな商品に生まれ変わらせることである。持続可能なものづくりを実現するアプローチとして、今、さまざまな業界で注目されている仕組みである。そこで私たちは、マスク生地には不要になった着物、口元の透明部分には捨てられていたビニール傘やクリアファイル、ゴム紐には要らなくなった靴紐などを使用することにした。

去年12月頃、法政大学キャンパス内ででたゴミの集積場に足を運んだ際、多くの廃棄物が山積みになっているのを目にした。そこでは特に、ビニール傘が多く廃棄されており、ビニール傘を使用したアップサイクルなものづくりをする必要性を強く感じていた為、材料としてビニール傘を選んだ。また、マスク生地として日本の伝統的衣装である着物を選ぶことにより、日本とパキスタンの文化交流を再現した。その上、着物の模様は繊細かつ華やかでもあるため、デザイン性の高いマスクが作れると考えた。

まずはYou Tubeで透明マスクの作り方を調べ、3つの試作品を作った。そして、ZOOMを介してパキスタンの聴覚障害者団体の方々にそのようなマスクに対してのニーズがあるかを伺った。その結果、口元が透明なマスクは現状のパキスタンでは入手できず、非常にニーズがあることがわかった。その後、20個のマスクを作製し、パキスタンに送った。そして、実際にマスクをつけてみてのフィードバックをもらった。そこでは、「マスク生地に使用した着物の生地がおしゃれで良い」、「口元が見えるからマスクをつけたままコミュニケーションがとれるようになった」などの好印象の意見を多数もらうことができた。また、「口とビニールの空間をもっと作った方が良い」という課題をもらった。そこで、より立体的な設計のものに改良することにした。また、佐野竜平准教授が持つ講義で、それまでの活動を発表する場を設けてもらい、活動に参加してくれる学生を募った。ZOOMで、相手のリアクションがない中での発表だった為不安だったが、12人の学生に参加を希望してもらうことができた。その学生と一緒に、コロナ対策を万全にした上で夏休み期間中の

5日間、法政大学多摩キャンパスにて、計30個のマスクを作製した。活動に参加してくれた学生は、法政大学現代福祉学部の1、2年生と立教大学コミュニティ福祉学部の1、2年生だ。一人一人が、「コロナ禍で活動に制約がかかる今だからこそ、国際協力やSDGsに貢献できる活動に参加したい」という強い思いをもっており、参加を募った私たち自身も、とても良い刺激と学びを得ることができた。

みんなの協力のもと作製したマスクは再度パキスタンに送り、フィードバックをもらった。喜んでもらうことができたので、非常に嬉しかった。約1年かけて行ってきたプロジェクトだったこともあり、とても大きな達成感を得ることができた。そしてこれまでの活動を通し、アップサイクルによる国際協力をする意義とものづくりの楽しさを知ることができた。また、廃棄物に付加価値をつけ、新たな商品に生まれ変わらせる「アップサイクル」という理念と、パキスタンの聴覚障害者を対象とした国際協力をかけ合わせることにより、環境問題解決やSDGs目標ゴール12「つくる責任つかう責任」、ゴール3「すべての人に健康と福祉を」ゴール10「人や国の不平等をなくそう」など、多くの課題へ通ずる活動となった。障害をもつ方々との協力と、環境問題をバラバラに捉えるのではなく、それぞれが重なり合ったところに活動を見出すことで、革新的なアイデアが生まれることを学ぶことができた。アップサイクルは各業界で注目されている理念ではありつつ、まだまだ世の中には浸透していないのが現状である。この活動に関しては一旦区切りをつけることになると思うが、今後もアップサイクルに関わる研究と活動を続けることによって、多くの人にアップサイクルの素晴らしさを知ってもらいきっかけを作りたいと強く思う。

また、この活動と並行して、主に手芸材料のアップサイクルから新しい循環社会を促進していく活動をしている「一般社団法人ソザイクル」へ研修をした。ソザイクルは、家庭にある使わなくなった手芸材料を回収し、それを必要とする作り手に届ける活動を行っている。具体的には、生地、ボタン、毛糸などの手芸材料や、着物や帯、反物、ミシンや編み機、工具類など、ハンドメイドの素材や材料、道具となりうるものを回収し、創作活動で必要とする作り手に届けている。こうして作り手のもとに届いた素材は、作り手によって新しい作品、商品に生まれ変わる。ソザイクルが材料と作り手の架け橋となり、アップサイクルなものづくりを促進しているのだ。また、無料回収した材料は手作り市やインターネットで販売し、売り上げの中から運営費などを除いた金額を社会貢献団体に寄付している。研修期間では、今までソザイクルが行ってきた活動や活動に対する思いを伺った。一番興味深かった活動内容が、「ソザイクル手作りマスクプロジェクト」というものである。このプロジェクトは、コロナの感染拡大によるマスク不足を解決すべく行われたものである。多くの作り手さんが参加し、販売・寄付というかたちで手作りマスクを届けたそう。そして、手作りマスクの販売手数料の中から20万円を日本赤十字社などに寄付したと仰っていた。ソザイクルに携わっている方とのお話の中で印象的だったのが、「コロナによってできた縁を大切にしたい。多くの人と繋がりを持つことができた。ある意味、コロナは悪いことばかりではないと言える。」という言葉である。コロナの感染拡大は日本、そして世界中が共有している困

難な局面にであるが、そのような状況でも得られるものがあるということを私たちも活動の中で強く感じていたので非常に共感できた。私たちの活動のことも話したところ、パキスタンの聴覚障害者にターゲットを絞り、新しいアイデアでアップサイクル商品を開発したことを褒めていただくことができた。私たちよりもずっと前からアップサイクル活動をされてきた方とお話できたことは非常に有意義であり、これからは繋がることばかりであった。

これら一連のプロジェクトと国内研修で学んだことを活かし、これからも国際協力、環境問題、そして障害を持つ方々のために活動を行っていきたい。